藤原惺窩点本『詩経』における朱子叶音説とその所拠本

佐藤　進

一　藤原惺窩点本『詩経』

藤原惺窩（一五六一―一六一九）は冷泉家の家柄に生まれたが、幼時から僧籍に入って学問を蓄えた。しかし一五八三年に還俗、以後は儒者としての生涯を送り、日本に本格的な朱子学を伝えた学者としてその名を知られる。本稿は惺窩がほどこした『詩経』の訓点に見える特殊な漢字音を整理し、それによって、訓読の所拠本が通行の朱子『詩集伝』ではなく、『五経大全』所載『詩集伝』であることを論ずるものである。

豊臣秀吉の第二次朝鮮征伐のおり（一五九七年の慶長の役、朝鮮側のいわゆる丁酉倭乱）、朝鮮の朱子学者姜沆が藤堂高虎に捕らえられて渡日し、一五九八年から一六〇〇年まで日本に滞在した。そのころ、惺窩も播州竜野の城主赤松広通の保護のもとにあって京伏見の赤松邸に滞在中で、姜沆と学を談ずる親交を結ぶことができた。

惺窩は姜沆らに四書五経を浄書してもらい、これに訓点をほどこしてその刊行を広通に勧めたが、関ケ原の合戦で西軍豊臣方であった広通は家康に自害を命ぜられ、刊行は実現しなかった。しかし、寛永五年（一六二八）、すでに惺窩没してのち、この時の点本そのものではないが、惺窩加点本が京都の安田安昌によって林羅山の跋文を付して刊行された。[1] いま、羅山の跋文を書き下して以下に掲げる。[2]

「本朝の詞人博士、古え振（よ）り五経を講ずる者、唯（ただ）漢唐諸儒の註疏を読むのみにして、未だ能く宋儒の道学を知らず。故に、世人皆訓詁に拘らはれ、物理を窮むる能はざること、殆ど数百千歳なり。然るに、今世往歳、妙寿院の惺窩滕先生、講学格物の暇（いとま）に、新に訓点を五経に加ふ。易は則ち程伝に従ひ朱義を兼ね、詩は則ち朱伝を主とし、書は則ち蔡伝に原（もと）づき、礼記は則ち陳説に依り、春秋は則ち胡伝に拠る。倭訓の古くして易ふ可からざる者の若きに至りては、これに旧点を参じへて尽くは削らざるなり。その筆すべく削るべき者もまた、竊（ひそか）にその義を取るのみ。頃（このごろ）人有り、京師より武州に来たりて曰く、今、洛人の安田安昌、薩摩正重等、五経白文を梓に鏤（ゑ）る、其の訓点は則ち滕先生の嘗て為す所なり、願はくは余に一言を請ひ、これを巻尾に置かんと。余謂ふ、先生嘗てこれが訓点を為すと雖も、その元本はこれを蔵して出ださず。蓋し其の副、人間に流落して然かあるか。点画偏旁は、未だ必ずしも三豕渡河の訛無きにあらずと雖も〔注：呂覧・察伝に「己亥渡河」を「三豕渡河」に誤った故事がある〕、教授参校せば、豈（あに）これ、千金満籯を貽（のこ）すの謀に非ずやと〔注：漢書韋賢伝に「鄒魯の諺に曰く、子に黄金満籯を遺（のこ）すよりは一経に如かず」とある〕。ここに於いてか、書す／戊辰春正月日／羅山子道春／筆を東武の寓所夕顔巷に把る／時寛永五暦歳次著雍執除〔注：著雍＝戊、執除（徐）＝辰〕之正月／洛陽烏丸通大炊町　安田安昌／新刊于容膝亭」

この惺窩点本五経は、いま汲古書院の「和刻本経書集成」に収められ、容易に手に取ることができる（長沢規矩也一九七六）。五経の経文、博士家伝来のそれに近い読みは原則として経文の右側に、大和言葉を駆使した絢爛たる文選読みは経文の左側に付され（村上雅孝一九九八）、視覚的には煩わしくはあるものの、読み下された言葉の響きには格別の調子が感ぜ

られる。

いま試みに衛風・淇奥第一章「瞻彼淇奥、綠竹猗猗、有匪君子、如切如磋、如琢如磨、瑟兮僩兮、赫兮咺兮、有匪君子、終不可諼兮」を読んでみる。まず、右側に付された博士家流の訓点に従ったものは次のようになる（表記は現代のそれにしたがった）。ちなみに服部宇之吉の「漢文大系」所収『詩経』もこの系統の訓読である（服部宇之吉一九七五）。

「彼の淇奥（キイク）を瞻（み）れば、緑竹猗猗（アア）たり、匪（ヒ）たる君子有り、切するが如く磋するが如く、琢するが如く磨するが如し、瑟たり僩（カン）たり、赫たり咺（カン）たり、匪たる君子有り、終（つい）に諼（わす）る可からず」

次に、経文の左側に付された訓点に従って書き下すと次のようになる。文選読みが豊富に使われる。

「彼の淇奥（キイク）のキのくまを瞻（み）れば、緑竹（リョクチク）のみどりのたけ猗猗（アア）とおいさかんなり、匪（ヒ）とあやある君子のむまきひと有り、切（き）れるが如く磋（と）げるが如く、琢（う）つが如く磨（みが）けるが如し、瑟（シツ）とつつしみ僩（カン）とおごそかに、赫（カク）とあきらかに咺（カン）といちじるし、匪（ヒ）とあやある君子のむまきひと有り、終（つい）に諼（わす）る可からず」

文選読みの字音部分をはずして読むことも可能であろう。

「かの淇（キ）のくまをみれば、みどりのたけおいさかんなり、あやあるむまきひとあり、きれるが如くとげるが如く、うつが如くみがけるが如し、つつしみおごそかに、あきらかにいちじるし、あやあるむまきひとあり、ついにわするべからず」

貝塚茂樹一九六一はこの三番目の読みを紹介して惺窩点を称賛したものである。

「羅山によるとこの詩経は朱子の伝によったのであるが、日本の王朝から行わる倭訓の易うべからざるものを採用しているという。清朝の考証学者の注、さらには金文の知識をもとにした新注から見れば、朱子の注の如きは、細部にはなお多くの

問題点を残しているにちがいない。これを底本としながら、藤原惺窩の訓は、実にすばらしい。先ず国語として格調が堂々としていて、朗々と誦すると、この盛声は自ら耳に充ちあふれる感じがする」

しかし、惺窩流の訓読は後世に流布しなかった。その理由は近世の訓読史あるいは訓読教育史のなかで検証されねばならないが、端的にいえば、この訓点は原文の暗誦にはつながらず、すなわち邦人の漢作詩文の参考にはなり得なかったからであろう。この和訓を暗誦したところで、それによって原文を復することなどはできない。逆に、博士家流の読み方のほうが容易に原文を想起できる。

もちろんその前に、詩の解釈が朱子の新注に近づきすぎているという側面を忘れるわけにいかない。たとえば召南・采蘩二章「于以采蘩、于澗之中、于以用之、公侯之宮」を清原宣賢（一四七五―一五五〇）の点に従えば「于（ゆ）いてもって蘩を采（と）る、澗のうちに、于（ゆ）いてもって用ゆる、公侯の宮に」と読む。「于以」は第一章の「鄭箋」「于以はなお往以と言うごとし」に従い、「宮」は「毛伝」「宮は廟なり」とあるのにそのまま従ったのである。一方、惺窩点は「于（ここ）にもって蘩を采（と）る、澗（たに）のうちに、ここにもって用ゆる、公侯の宮に／みやに／かいこやに」のように「宮」に一つの音読み（本文右に縦線表記）と二つの訓読みを与えている。「みや」は『類聚名義抄』『色葉字類抄』などにも見える伝統的な訓で、朱子「集伝」にも「宮は廟なり」とあるのによったものである。しかし「かいこや」は伝統的な古字書には一切記述のない訓である。それも道理で、これは朱子「集伝」の「或るひと曰く、即ち記にいわゆる公桑蠶室なり〔注：礼記・祭義に、古は天子諸侯、必ず公桑蠶室あり、とある〕」にもとづく解釈である。和訓というよりはむしろ解釈である。「于」については「毛伝」「集伝」両者の「于は於なり」に従った。

それでも「宮」の例は新注に両説が併記されているのでまだ分かりやすい。古注と新注とで解釈が相反している詩句で、新注のみをとる場合が少なくないのには注意を要する。たとえば召南・甘棠一章「蔽芾甘棠」について、宣賢は「蔽芾（ヘイヒ）たる甘棠（カントウ）を」と読み、「蔽」の意味は「毛伝」の「蔽は小（すくな）き貌」に従うが、惺窩は「蔽芾

（ヘイヒ）とさかんなる甘棠（カントウ）のあまなし」と読み、「蔽芾」の意味は「集伝」の「蔽芾は盛んなる貌」とあるのに従うだけで、相反する解釈の「毛伝」は一顧だにしない。

日本の外国文化摂取の場面ではこうした態度は歓迎されず、新注渡来以後も古注と新注を折衷する解釈を志向してきたのではないか。そうした側面も惺窩点が流布し得ない原因であったと考えるが、いま、そのことを詳述するいとまはない。

訓点語に関心を絞ると、村上雅孝一九九八、同二〇〇五では惺窩点における博士家の古訓の伝承を確認し、中古語（和語）の駆使による訓の創出をえがきだすなど、一定の成果を上げている。ただ、やはり『詩経』は「詩序」「毛伝」「鄭箋」『経典釈文』を含む「注疏」、および朱子の「集伝」の詩説（字句の訓詁の参照だけでは不充分である）など、これらを慎重に読み解いた上での分析が必要であり、そこから新注にもとづく惺窩の解釈、いわば「新訓の創出」に照明をあててその独自性や本質を探り出すべきである。この問題についてはいずれ稿を改めて論じたい。

二　字音表記の問題

惺窩点『詩経』の表記には検討を加えるべき問題が多方面にわたって存在する。和語の表記についてはひとまずおき、ここでは漢字音の扱いについて問題にする。

①まず、刊本にありがちな誤刻とみられる例がある。周南・関雎二章「荇菜＝カフサイのあさゞ」の「荇カフ」は、あるいは召南・采蘋一章「行潦＝□ラフのにわたづみ（「行」に字音はあてていない）」の「潦ラフ」のようにウをフに書くのは、古形を表記しようとして誤った可能性もあるが、誤刻とみてよいだろう。ちなみに、ほかの章句で「荇」と同音の「行」はカウになっている。

②しかし、鄭風・大叔于田二章「縱送セウソウとやはなちゆみ（を）〔お〕さむ」の「縱セウ」はほかの章句でもセウで

ある。これは惺窩の時代すでにショウと拗音化していたものを、古形に復す際に犯した錯誤であろう。復古錯誤ともいうべき現象で、例えば「泥鰌＝ドジャウ」がドジョウになってから古形に復そうとしてドゼウと書いてしまうのと同じである。

③原則として漢音を使用する。たとえば周南・兔罝一章「公侯干城（公侯のきみのカンゼイのたてしろなり）」の「城＝ゼイ」、また邶風・凱風三章「母氏労苦（母氏労コす）」の「苦＝コ」のように、通行する呉音「城＝ジョウ（ジャウ）」「苦＝ク」をとらない。(3)

④その逆に、一見、呉音併記のように見えるものは実は呉音ではなく、朱子『詩集伝』の叶韻反切にもとづく漢字音表記である。たとえば鄘風・定之方中二章「景山与京」は「サンとキャウ（ケイ）と、かげはかることは」と読み、「京」字の右側にキョウ、左側にケイと字音を表記しているが、右のキョウは『詩集伝』の音注「叶居良反」によるものである。いま惺窩点を通覧してみると、叶韻反切による字音表記は一八〇箇所を数える。『詩集伝』には通行本なら一三六〇例、宋刊本なら一五七六例の叶韻反切があるとされる（注10参照）。その一三、二％ないしは一一、四％程度を惺窩が日本漢字音として導入している事実は興味深い。その一覧が別表であり、惺窩が叶韻反切によってつけた字音の全てをあげてある。一覧表は以下の考察に資するとともに読書の際の参照資料にもなるであろう。

三　叶韻説の興廃

『詩経』における叶韻とは、紀元前五百年前後に編定された詩を後世の読者が読む場合、その間に生じた字音の歴史的なずれを修正して、つまり臨時に読み替えて通押を求める処理のことをいう。(4)

たとえば邶風・燕燕の「燕燕于飛、下上其音、之子上歸、遠送于南、瞻望弗及、實勞我心」、上古では「音」「南」「心」三字が押韻していたはずであるが（すべて中舌母音）、六朝期になるとイム・ナム・シムのように、このうち「南」の母音

が遠くずれてしまっていた。そこで、梁の沈重（五〇〇―五八三）はナムをニムと読み替えて韻を協すべきだと考え、彼の『毛詩音』に「協句、宜乃林反」とあった（これはすでに佚書で、当該箇所は唐・陸徳明『経典釈文』の引用による）。なお叶韻は、沈重の使用した「協句」のほか、「合韻」「協韻」「叶音」などということもある。

唐の陸徳明（五五六？―六二七？）は沈重の協句説を紹介しつつも、「古人は押韻規則がゆるやかであったので、南は字の如くナムに読んでかまわない」として臨時の読み替えを採用しなかった。

宋の呉棫（一一〇〇―一一五五）に至ると『毛詩叶韻補音』が編まれて全面的に叶韻説の採用があったが、この書は伝わらない。かわりに上古の『易経』・『書経』・『詩経』から同時代の欧陽修や蘇軾らの作品五十種を資料とし、押韻例を採取して編んだ『韻補』が残っており（一一六八年、徐棫の序をつけて刊行）、ここには沈重の協句など、六朝から唐までの叶韻説が大幅に取り入れられた。

宋・朱子（一一三〇―一二〇〇）は『詩集伝』（淳熙四年一一七七序）を編むにあたって、呉棫の『毛詩叶韻補音』の叶韻説を全面的に採用して注釈を書いた。叶韻の適用範囲をさらに『楚辞』にまで広げたのが『楚辞集注』である。すなわち、叶韻説の最も豊富な資料を今日に提供しているのが朱子なのである。

しかし、その後の『詩経』研究は次第に叶韻の批判にかたむき、後代の字音で読んで押韻しなくても、後代は韻が崩れているものだから当然なのだという考え方になってくる。

元の戴侗『六書故』（一二二〇年刊）には「たとえば野をジョ（上與反）、下をゴ（後五反）とするなどは、両方とも古の正音であって合とは異なり、合韻などではない」[5]とあり、明の焦竑（一五四〇―一六二〇）『焦氏筆乗』（一六〇六年刊）には「詩には古韻今韻があるが、古韻は久しい間に伝わらなくなり、毛詩離騒を学ぶものはこれらをみな今韻で読む。韻が合わないことがあると強引に発音して、それを叶だという。わたしはそうではないと思う」[6]と言う。また焦竑は友人陳第（一五四一―一六一七）の『毛詩古音考』に序（万暦三四、一六〇六年の年記）を寄せて「あちこち付き合わせ、古韻はおのず

と今と異なるのに叶とするのは誤りであるのを知った。だから『筆乗』でそのことに論及したのだが、陳第がひそかに私と同じ考えだったとは思わなかった[7]」と書いた。

陳第の『毛詩古音考』は跋に「むかし焦太史の『筆乗』を読んでみると『古詩に叶韻はない』と書いてあったが前人が言わなかったことであり、まことに名言だと思った[8]」と記した。この書は『詩経』の押韻をそれ独自のものとして整理し（本証と呼んだ）、ほかの資料の押韻現象を傍証として資料の扱いを厳密にした著述である。彼はまた『毛詩古音考』自序では「時には古今があり、地には南北があり、字には更革があり、音には転移があるのも、勢いの必ず至る所なのである[9]」と言って、言語が時間と空間によって変わり得ることを明言したのであった。

こうして叶韻説は影をひそめていったのであるが、叶韻を論ずるために整理集積された資料は、明代の一層の整理を経て清朝古音学に引き継がれていった[10]。

四　惺窩点の叶韻から見えるもの

叶韻を『詩経』の訓読に導入したのは惺窩がはじめてである。その導入のしかたと、その意義と、さらには訓釈の所拠本のことなど、叶韻一覧表から見えるものをまとめておきたい。

（1）博士家の清原宣賢らは『詩集伝』を読んではいるが、朱子の詩説を採用することについては大変に控えめであった。しかるに、惺窩はほぼ全面的に朱子の詩説によりつつ読み解いた。そのことが叶韻説を採用した漢字音にまで及んでいることに注目するならば、いかにまるごと朱子の導入をはかったかが思いやられる。

（2）叶韻による字音読みは文選読みを行なう箇所に多く現れる。惺窩点の左側は和訓を多用する読み方を示すが（村上雅孝一九九八）、音読み→訓読みという文選読みを行なって、字音の和諧を強く意識したものであったことが想像できる。

（3）訓読みする漢字に字音をつけないのは当然で、叶韻字音の記述の余地はない。しかし音読みする箇所であって、且つ『詩集伝』に叶韻反切が附されていても、正音のみであることもある（召南・小星の「昴」が叶力求反でもバウのみ）。

（4）惺窩点は「集伝」に叶韻があれば叶韻と正音とを併記するのが普通である。ただ、「集伝」ですでに正音反切がついても正音字音を書かないものがある。反対に、それがなくても通行の漢音をつけていることが少なくない（一覧表字音欄の【　】）。

（5）惺窩の叶韻字音は、弟子の林羅山のいわゆる道春点『詩経』には伝わらなかったようである。家蔵の享保十八年（一七〇三）刊『新点校正詩経』では「發＝ヘツ」「儦＝ホウ」以外にはそれらしい字音がない。ただし道春点の初期の本ではどうなっているか、今後の調査をまつ必要があろう。どうやら惺窩の叶韻字音は空前で絶後であった可能性がある。

（6）一覧表で惺窩の叶韻字音のもとになった「集伝」の反切を検討してみると、明清にかけて通行したテキストの『詩集伝』にもとづくものではないことが明らかである。ちなみに、明清の通行本『詩集伝』は武英殿版のそれで容易に確認でき、基本的にはわが「漢文大系」（服部宇之吉一九七五）の「集伝」も同じである（ただし、字音は当該字のもとになく、一箇所にまとめられたのが不便である）。以下の字音は通行本には存在しない叶韻反切であるにもかかわらず、惺窩点では叶韻字音になっているリストである。参考につけた反切は『詩伝大全』によるもの（後述）。「叶」字が抜けていて叶韻であるものも含まれる。以下の一字二音の例は叶韻の一種とみなされている（金周生二〇〇五など）。

11汝墳①「伐其條枚」の「枚＝ビ」叶莫悲反、バイ（通行本：音梅）
27碩人③「朱蚣鑣鑣」の「鑣＝ホウ」叶音褒、ヘウ表驕反（通行本：音標）
115山有樞①「山有樞」の「樞＝ヲウ、シュ」烏侯昌朱二反（通行本なし）
115山有樞①「隰有榆」の「榆＝イウ、ユ」夷周以朱二反（通行本なし）
163皇皇者華②「我馬維駒」の「駒＝コウ、ク」恭于恭侯二反（通行本なし）

218車牽①「間關車之牽兮」の「牽＝カイ、カツ」胡瞎下介二反（通行本なし）

一方、通行本『詩集伝』と別系統のテキストには、陸心源旧蔵書、すなわち我が静嘉堂文庫所蔵の宋刊遞修本『詩集伝』がある。惺窩点叶韻字音はむしろこちらのほうによく合うのであるが、惺窩が宋刊『詩集伝』を見たとは考えにくい。また、宋刊本ではかえって合わないものがある。以下の例がそれである（反切は『詩伝大全』による）。

186白駒③「慎爾優游」の「游＝ヲ」叶汪胡反（宋本「云俱反」ウ）

297駉③「以車繹繹」の「繹＝ヤク」叶弋灼反（宋本に音注なし）

上の八条をすべて満たす叶韻反切は、結局、元の胡広が編集した『五経大全』のなかの『詩伝大全』（この書名は四庫全書所収のもの、普通は『詩経大全』）であった。

以上のほかにも、「集伝」には叶韻とは書いていないが、召南・甘棠一章「蔽芾」の「芾＝ヒ」が通行本では「音廢ハイ」とあり、宋本「集伝」ないしは『詩伝大全』では「芾、非貴反＝ヒ」となっているような箇所がいくつかある。

要するに、藤原惺窩が導入した朱子の詩説・訓釈は単行の『詩集伝』ではなく『五経大全』によったものであった。経文についてはつとに阿部吉雄一九六五が内閣文庫蔵の「姜沆彙抄十六種」の紹介をする中で、「（「彙抄」の）『易』の底本は『五経大全』に拠ったもののようで『程子易伝』に従い『朱子本義』を合わせている。惺窩点と称する林羅山附跋の『新板五経』（寛永五年刊、内閣文庫蔵）と比較すると、この易だけではなく後記の五経は全部それに一致している」といって、惺窩点『詩経』の経文は『五経大全』本によるとした。

確かに、惺窩点本ではたとえば179車攻⑥「兩驂不猗」の「猗」字を『五経大全』本と同じ「倚」字に作っていることから、阿部氏の調査が確認できる（一覧表参照）。

ただし、ここでは経文のみならず字音のつけかたから見て、惺窩が訓点をつける際に机上においたのは、まぎれもなく『五経大全』本『詩経』であったことが確かめられた。

本論冒頭にかかげた『新板五経』の羅山跋に「易は則ち程伝に従ひ朱義を兼ね、詩は則ち朱伝を主とし、書は則ち蔡伝に原（もと）づき、礼記は則ち陳説に依り、春秋は則ち胡伝に拠る」と書いてあったが、これはすべてそのまま『五経大全』を構成する宋儒の注釈であって、本論では『詩経』の字音によって明確に羅山の文言を確認したことになろう。[11]

日本朱子学史にとって『五経大全』に含まれる明人の著述部分の思想史的意義はそれほど大きくはないと思われるが、将軍家の紅葉山文庫や昌平坂学問所には数点の舶載『五経大全』があっていずれも国立公文書館に現存する。[12] それは必ずしも明人の儒学を学ぶために「大全」を将来したというのではなく、当時、宋学の五経を入手しようとしたら『五経大全』を購うのが便宜であったためだ。宋学の教科書として『五経大全』を舶載したのだと考えてよい。

ただし、たとえば今日我々が惺窩点『詩経』を読み解く場合に、「漢文大系」などの通行本『詩集伝』を傍らに置くだけでは不充分で、できる限り『詩伝大全』を参照しつつ読まなければならぬであろう。叶韻字音の読み取りという、いわば字面の問題だけからでもそのことが確認できる。

〔註〕

（1）藤原惺窩の伝記は、太田兵三郎一九三八a、太田兵三郎一九三八b、阿部吉雄一九六五、太田青丘一九八五などに詳しい。

（2）この跋文は白文で記されており、太田兵三郎一九三八bが返点を付して引用しているものの、典故を確認せざるための誤読を含む。ここではそれを糾して書き下した。

（3）当時の通行字音を確認するには、たとえば『日葡辞書』（一六〇三年）の表記でみればよい。そこでは、「城」はIõジャウであり、「苦」はcuクである（土井忠生ほか一九八〇）。

（4）以下の叶韻説の紹介は主として賴惟勤一九五六による。

（5）（行、戸剛戸庚二切、書傳行皆戸郎切、易與詩雖有合韻者、然行未嘗有劦庚韻者、慶皆去羊切、未嘗有劦映韻者、）如野之上與切、下之後五切、皆古正音、與合異、非合韻也。

（6）詩有古韻今韻。古韻久不傳、學者于毛詩離騷、皆以今韻讀之。其有不合、則強爲之音、曰此叶也。予意不然、…。

（7）彼此互證、因知古韵自與今異、而以爲叶者謬耳、故筆乘中間論及此、不謂季立俯與余同也。

（8）往年讀焦太史筆乘曰「古詩無叶音」、此前人未道語也、知言哉。

（9）蓋時有古今、地有南北、字有更革、音有轉移、亦勢所必至。

(10) 中国における朱子『詩集伝』叶韻についての評価は解放後までふるわないものであった。これを詩経時代の古音研究とは見なさず、かえって宋代の語音を考察するための資料になるととらえた研究が見られた程度である（許世瑛一九七四、王力一九八二）。

しかし近年になって状況が変わってきた。陳広忠一九九九ａｂは『詩集伝』の全叶韻一三六〇例に（劉曉南二〇〇二によれば一五七六例。陳氏は通行本、劉氏は拠宋本排印によるものか）音理上の分析を加えてその八二％は正確なものであることを導き出し、朱子は古音学理論の最初の実践者であると主張した。

ついで、陳鴻儒二〇〇〇は、朱子の叶韻は朱子の頭の中にある古音であるとみて、舒声十三部・入声八部の体系であることを証明した。陳鴻儒二〇〇一はその叶韻観の側面を掘り下げて検討したもの。

劉曉南二〇〇三では、朱子の叶韻反切には、実際の語音・音理の解明・文献の旧読などの側面からみて、そのすべてに根拠があり再評価する必要があると説く。さらに劉曉南二〇〇四では、朱子叶韻の本意は臨時の読み替えにあるのではなく、宋代の人々が使っていた一字多音の中から一音を選定して韻を合わせたのだとした。劉曉南・周賽紅二〇〇四は王質（一一三五―一一八九）の『詩總聞』や楊簡（一一四一―一二二六）の『慈湖詩伝』などから関係資料を拾いだし、呉棫の佚書『毛詩叶韻補音』一三五九条を復元して、『詩集伝』はそのうち五〇〇条近くを改訂して使用したことを指摘し、その改訂のパターンを分析した結果、朱子は朱子で自己の古音学を提示したと説く。劉曉南二〇〇五はその分析をさらに一歩進め、呉棫『毛詩叶韻補音』を朱子が修訂した意図について、①方言と文献資料をによって古音を考定し、理論的根拠をさらに確実なものにした、②古音が協諧するという前提で、韻字の洪細開合を整え一層なめらかに和諧するようにさせた、③古音を変更しないという前提で、科挙用韻の「詩韻」に近づくようにした、という三点を指摘している。

張民権二〇〇五は、本書の刊行こそ二〇〇五年であるが十数年をかけた労作で、とくに王質『詩總聞』楊簡『慈湖詩伝』朱子『詩集伝』の三書から『毛詩叶韻補音』を復元した下篇「呉棫『詩補音』彙考校注」は三二〇頁をこえる資料的価値の極めて高い一篇である。また、朱子以外の宋代の古音研究の情況を紹介し、それらが後代の古音研究の基礎を築いたとして、中国音韻学史の新しいパラダイムを提出した。

台湾の浩瀚な研究書、金周生二〇〇五では①朱子の注音は宋代語音研究の資料たり得ないこと、②やはり王質『詩總聞』楊簡『慈湖詩伝』から関係資料を拾いだし、『毛詩叶韻補音』を復元して（ただし、張民権の作業が進行しつつあることを仄聞し、復元結果は公表しなかった）、劉曉南とは逆に、朱子『詩集伝』の叶韻はそのほとんどが『毛詩叶韻補音』を沿用した注音であるとしている。本書には行論のデータを全て付録のCDROMで提供する（WindowsXPの台灣モードで使用可能）。

朱子叶韻を古音研究ととらえない最近の研究には蔣冀騁二〇〇一があり、現代閩方言と宋代閩方言の語音体系と韻図編纂の実際の状況とを考察して、朱子の叶韻反切は閩方言の反映であり、これまで言われてきたような、舌尖母音（ziやzhiの母音）が朱熹の反切に見られるという説には根拠がないとする（許世瑛一九七四、王力一九八二への反論。舌尖母音宋代発生説は周祖謨「宋代卞洛語音考」補仁学誌一九四三で出され、のち反論が少なくない）。

劉曉南二〇〇一も朱子は自己の母語閩語と古音が「暗合」しているとみて、叶音の認定の際にはその大部分について閩音に依拠して古

音を確定したと説き、叶音反切を閩音で説明する試みを行った。劉曉南二〇〇二では、朱子叶音には反切上字の改注が少なくないことから、この上字の声母と宋代の文献資料、下って現代閩方言などと対照させてみると、そこには宋代閩方言の音韻の実態が反映されているとし、一三種類の音韻特徴を帰納して一九声母を再構成した。

(11) 『五経大全』は永楽帝の命を受けた胡広の勅撰書。『易』(周易伝義大全)は二董氏(董楷・董真卿)と二胡氏(胡一桂・胡炳文)の書、『書』(書伝大全)は陳櫟の『書説纂疏』、『詩』(詩経大全あるいは詩伝大全)は劉瑾の『詩伝通釈』、『礼』(礼記集説大全)は陳澔の『礼記集説』、『春秋』(春秋集伝大全)は汪克寛の『春秋胡伝纂疏』を採用したのであるが、これらの書はそれぞれ朱子の『周易本義』、蔡沈の『書集伝』、朱子の『詩集伝』、陳澔の『礼記集説』、胡安国の『春秋伝』をほぼそのまま取り入れて簡単なコメントを加えたものに過ぎない。したがって、羅山の跋文はこれら『五経大全』の種本を羅列し、惺窩はあくまでも宋学、程朱の学にのっとった加点を行なったことを明らかにしているとみてよい。

(12) ①明・成化七年本(林羅山旧蔵)、②明・万暦三三年本(昌平坂学問所旧蔵)、③明・万暦三三年本(紅葉山文庫旧蔵)、④清・康熙三五年本(紅葉山文庫旧蔵)、⑤清・康熙五六年(紅葉山文庫旧蔵)、⑥朝鮮本(昌平坂学問所旧蔵)

【参考文献】

〔日本〕五十音順

阿部吉雄一九六五『日本朱子学と朝鮮』東京大学出版会
石田一良・金谷治一九七五日本思想大系28『藤原惺窩　林羅山』岩波書店
太田兵三郎一九八三a「藤原惺窩略伝」『藤原惺窩集』国民精神文化研究所所収
太田兵三郎一九八三b「藤原惺窩の人と学芸」『藤原惺窩集』国民精神文化研究所所収
太田青丘一九八五人物叢書『藤原惺窩』吉川弘文館
貝塚茂樹一九六一「詩経古訓」世界文学大系月報47・第7巻A付録、筑摩書房
土井忠生ほか一九八〇『邦訳日葡辞書』岩波書店
長沢規矩也一九七六『和刻本経書集成　正文之部　第一輯』汲古書院
服部宇之吉一九七五漢文大系12『毛詩・尚書』(増補版)冨山房
村上雅孝一九九八『近世初期漢字文化の世界』明治書院
頼惟勤一九五六「清朝以前の叶韻説について」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第八巻(『中國音韻論集　頼惟勤著作集I』汲古書院一九八九)

〔中国〕拼音順

陳鴻儒二〇〇〇　『詩集伝』叶韻与朱熹古韵、『古漢語研究』二〇〇〇―一（総四六）
陳鴻儒二〇〇一　『詩集伝』叶韻辨、『古漢語研究』二〇〇一―二（総五一）
陳広忠一九九九a　朱熹『詩集伝』叶韻考辨、『安徽大学学報（哲学社会科学版）』一九九九―二
陳広忠一九九九b　朱熹『詩集伝』叶韻考辨（続）、『安徽大学学報（哲学社会科学版）』一九九九―三
蔣冀騁二〇〇一　朱熹反切音系中已有舌尖前高元音説質疑、『古漢語研究』二〇〇一―四（総五三）
金周生二〇〇五　『呉棫與朱熹音韻新論』、洪葉文化事業有限公司
劉曉南二〇〇一　朱熹与閩方言、『方言』二〇〇一―一
劉曉南二〇〇二　朱熹詩経楚辞叶音中的閩音声母『方言』、二〇〇二―四
劉曉南二〇〇三　論朱熹詩騒叶韻的語音根拠及其価値、『古漢語研究』二〇〇三―四（総六一）
劉曉南二〇〇四　朱熹叶韻本意考、『古漢語研究』二〇〇四―三（総六四）
劉曉南二〇〇五　論朱熹『詩集伝』対呉棫『毛詩補音』的改訂、『浙江大学学報（人文社会科学版』二〇〇五―三
劉曉南・周賽紅二〇〇四　朱熹呉棫毛詩音叶異同考、『語言研究』二〇〇四―四（総五七）
王力一九八二　朱熹反切考、『語言文字研究専輯』（中華文史論叢増刊）上海古籍出版社
許世瑛一九七四　『詩集伝』叶韻之声母有与『広韻』相異者考、『許世瑛先生論文集』弘道文化事業公司
張民権二〇〇五　宋代古音学与呉棫『詩補音』研究、商務印書館

〔古典資料〕

清原宣賢　古典研究会叢書　漢籍之部一　『毛詩鄭箋』汲古書院一九九二
胡広　『詩傳大全』二十巻（巻四欠、家蔵）乾隆中期以前刊、松平定信旧蔵書
呉棫　『宋本韻補』中華書局一九八七
朱熹　『詩集伝』（宋本影印）文学古籍刊行社一九五五
同　同（拠宋本排印）中華書局一九五八（新一版、上海古籍出版社一九八〇）
同　『詩経集伝』（拠武英殿本影印）上海古籍出版社一九八七
焦竑　『焦氏筆乗』上海古籍出版社一九八六
戴侗　『六書故』（文淵閣四庫全書本）台灣商務印書館一九九七
陳第　『毛詩古音考』（康瑞琮点校）中華書局一九八八

The application of the phonetic harmony（叶韻）to the Japanese readings of *the Odes*（詩経）by Seika Fujiwara（藤原惺窩）

In this paper I pointed out that Seika Fujiwara had applied the phonetic harmony in Collected Commends on the Odes（詩集伝） to the Japanese readings. And Seika did not use an original version of Collected *Commends on the Odes* as his source book, but he used a revised version in *Complete Books of Five Classics*（五経大全） by Hu Guang（胡広） in Ming dynasty.

引得	詩題 章数	原文	訓読：（左側表記）、〔推定字音〕、〔別読み〕	字音：大全音注（通行本の音注）	メモ
2	葛覃①	其鳴喈喈	そのなくこと ケイケイとやはらげり	喈ケイ、叶居奚反	正音カイ
10	汝墳①	伐其條枚	そのデウビ（バイ）の えだと からとをきる	枚ビ、叶莫悲反 バイ、（音梅）	ビ通行本なし
18	羔羊①	委蛇委蛇	イタイタたり	蛇タ何、叶唐何反 【イ】、音移	委字右にイ 蛇字左にタ
22	江有汜①	江有汜	えにシ（イ）あり〔よどみあり〕	汜イ、叶羊里反 シ、音祀	
26	邶・柏舟①	泛彼柏舟	ハンとながれたるかのハク〔シュウ〕のかえのふね	汎ハン、（芳梵反） 【ヘン】、芳劍反	ハン宋本なし、大全なし cf.鄘・柏舟①
39	泉水③	載脂載舝	すなはちあぶらさし すなはちくさびさす〔カイ（カツ）す〕	舝カイ、叶下介反 カツ、胡瞎反（音轄）	
43	新臺②	新臺有洒	〔シンダイ〕セン（サイ）と たかき事あり	洒セン、叶先典反 サイ、七罪反（音璀）	サイをセイと誤刻 「七」宋本漫漶
50	定之方中②	景山與京	サンとキャウ（ケイ）と かげはかることは	京キャウ、叶居良反 ケイ	漢呉音併記ではない
55	淇奥①	綠竹猗猗	〔リョクチク〕のみどりのたけ アアと をひさかんなり	猗ア、叶於何反 【イ】、於宜反（音醫）	
56	考槃①	考槃在澗	ハンを〔たたづむことを〕なして（たたいて）ケン（カン）に〔たにに〕あり	澗ケン、叶居賢反 カン	ケン、非呉音
56	考槃①	碩人之寬	セキ〔ジン〕のケン（クワン）〔ひろき〕あり	寬ケン、叶區權反 クワン	
57	碩人③	四牡有驕	〔シボ〕のよつのむま カウ（キョウ）とさかんなることあり	驕カウ、叶音高 キョウ、起橋反（音蹺）	キョウ←ケウ
57	碩人③	朱幩鑣鑣	〔シュ〕フンのあけのくつわづら ホウホウ（ヘウヘウ）と さかんなり	鑣ホウ、叶音褒 ヘウ、表驕反（音標）	ホウ通行本なし 「表」大全作「耒」
57	碩人④	北流活活	〔ホクリュウ〕ケツケツ（クワツクワツ）とながる	活ケツ、叶戸劣反 カワツ、古闊反（音括）	
57	碩人④	施罛濊濊	あみをまうくることケツケツとみづのこえあり	濊ケツ、叶許月反 【カツ】、呼活反	

57	碩人④	鱣鮪發發	テンイ ヘツヘツ（ハツハツ）とさかんなり	發ヘツ、叶方月反 ハツ、補末反（音撥）	道春ヘツか？胡粉塗抹
58	氓②	以望復關	もってフクケン（クワン）をのぞむ	關ケン、叶圭員反 クワン	ケン、非呉音（員、慣用音イン、漢音エン）
76	將仲子③	無折我樹檀	わが〔シウ〕〔うへし〕テン（タン）をおることなかれ	檀テン、叶徒沿反 ダン	
79	清人①	二矛重英	ニボウのふたつのほこ〔チョウ〕ヤウ（エイ）なり	英ヤウ、叶於良反 エイ	ヤウ、非呉音
90	風雨①	雞鳴喈喈	とりのなくこと ケイケイと なくこえあり	喈ケイ、叶居奚反 【カイ】、音皆	
90	風雨②	雞鳴膠膠	とりのなくこと ケウケウと なくこえあり	膠ケウ、叶音驕	正音コウ（カウ）
91	子衿③	挑兮達兮	〔チョウ〕とかろがろしく テツ（タツ）とほしひままなり	達テツ、叶他悅反 タツ、他末反（音獺）	
95	溱洧①	方秉蕑兮	まさにケン（カン）を〔ふじばかまを〕とる	蕑ケン、叶古賢反 カン、古顔反（音間）	
98	著③	尚之以瓊英乎而	くわうるに〔ケイ〕ヤウ（エイ）をもってせり	英ヤウ、叶於良反 エイ	
99	東方之日②	在我闥兮	わがテツ（タツ）にあり	闥テツ、叶它悅反 タツ	「它」通行本作「宅」
102	甫田①	維莠驕驕	これはくさケウケウ（コウコウ）とはびこれり	驕カウ、叶音高 ケウ	
102	甫田②	勞心怛怛	ロウシン テツテツ（タツタツ）とうれう	怛テツ、叶旦悅反 タツ	
104	敝笱①	其魚魴鰥	そのうをは ハウクワン（キン）	鰥キン、叶古倫反 クワン、古頑反（音關）	
105	載驅①	齊子發夕	セイシ ハッシャク（セキ）す	夕シャク、叶祥龠反 セキ	
105	載驅④	行人儦儦	〔コウジン〕ホウホウ（ヘウヘウ）と をほし	儦ホウ、叶音褒 ヘウ、表驕反（音標）	道春ホウ（広韻になし）

106	106	107	108	111	112	112	112	112	112	112	112	115	115	115
猗嗟③	猗嗟③	葛屨①	汾沮洳②	十畝之間①	伐檀①	伐檀①	伐檀①	伐檀②	伐檀③	山有樞①	山有樞①	山有樞②	山有樞②	山有樞①
射則貫兮	四矢反兮	好人服之	美如英	桑者閑閑兮	坎坎伐檀兮	胡瞻爾庭有縣貆兮	不素餐兮	坎坎伐輻兮	不素飧兮	山有樞	隰有榆	山有栲	弗洒弗埽	白石皓皓
ゆみいればすなはちケンたり〔つらぬく〕	シシ〔よつのや〕ヘンして〔かえそうして〕	〔コウジン〕ホクせり〔きる〕	〔ビ〕なること はなの〔ヤウの〕ごとし	くわとるもの ケンケン（カンカン）としづかなり	カンカンとちからをこしして テン（タン）のくるまのきをきり	いづくんぞなんぢのにわをみればかかれるケン（クワン）〔むじな〕ある	むなしくセン（サン）とくらはず	カンカンとしてヒョクを〔やを〕きり	むなしくソン（サン）とむまくらはず	やまにヲウ（シュ）あり	さわにイウ（ユ）あり	やまにキウ（カウ）〔をおち〕あり	セイせ（シャせ・サイせ）ず ソウ（サウ）せず〔はらはず〕	〔ハクセキ〕コウコウ（カウカウ）たり
貫ケン、叶扃縣反	反ヘン、叶孚絢反	服ホク、叶蒲北反	英ヤウ、叶於良反	閑ケン、叶胡田反	檀テン、叶徒沿反タン	貆ケン、音暄クワン	餐セン、叶七宣反サン、七丹反	輻ヒョク、叶筆力反【フク】、音福	飧ソン、素門反（音孫）【シン】、叶素倫反	樞ヲウ（シュ）、烏侯昌朱二反	榆イウ（ユ）、夷周以朱二反	栲キウ、叶去九反カウ、音考	埽ソウ、叶蘇后反	皓コウ、叶胡暴反カウ、胡老反
正音カン（クワン）	正音ハン、次句「亂」字「一を」とするのみ	正音フク	正音エイ	正音カン、cf.上句「間」		原書に叶字を欠く叶音	サン通行本なし		正しくは、シン（ソン）	二反とも通行本なし	二反とも通行本なし	和語「あふち」	洒、音注なし	カウ通行本なし「胡老」宋本作「古老」

116	120	128	128	128	128	128	128	128	132	132	133	136	140	140
唐・揚之水②	羔裘②	小戎①	小戎②	小戎②	小戎③	小戎③	小戎②	晨風①	晨風②	無衣②	宛丘③	東門之楊②	東門之楊②
從子于鵠	維子之好	駕我騏𢍰	騏駵是中	騧驪是驂	厹矛鋈錞	蒙伐有苑	鴥彼晨風	山有苞櫟	脩我矛戟	值其鷺翿	其葉肺肺	明星晳晳	邛有旨苕
シにコウにしたがはん	これシがコウ（カウ）	わがキシウ（ソク）のあをくろあじろに〔ガ〕す	キリウはこれセウ〔あたる〕	クワリはこれシン	キウボウのみすみのほこ ヨクシンのかざれるつかあり	まじはれるたて（まじはりえがけるたて）あや（ウン）あり	イツととくとぶかの〔シン〕ヒンのたか	やまにハウラク（レキ）あり	わが〔ボウ〕キャク（ゲキ）をおさめて	その〔ロ〕チウ（タウ）のさぎのはたをたつ	そのはヘイヘイとさかんなり	〔メイセイ〕セイセイとあきらかなり	キャウに（をかに）シタウ（テウ）あり
鵠コウ、叶居號反	好コウ、叶呼侯反 カウ、呼報反（去聲）	𢍰シウ・ソク、之樹反（音注）又之録反	中セウ、叶諸仍反	驂シン、叶疏簪反	錞シン、叶朱倫反 【タイ】、徒對反	苑ウン、叶音氳	風ヒン、叶孚愔反	櫟ラク、叶歴各反 レキ、盧狄反（音歴）	戟キャク、叶訖約反 ゲキ	翿チウ、叶殖有反 ダウ、音導	肺ヘイ、普計反（音霈）	晳セイ、之世反（音制）	苕タウ、叶徒刀反 テウ、徒雕反（音條）
正音コク	「侯」大全作「候」	二反併記で叶字を欠く例		正音サン							正音ハイ 原書に叶字を欠く叶音	正音セキ 原書に叶字を欠く叶音	
月出②	防有鵲巢①	東門之楊②	東門之楊②	宛丘③	無衣②	晨風②	晨風①	小戎③	小戎②	小戎①	羔裘②	唐・揚之水②	
佼人懰兮	邛有旨苕	明星晳晳	其葉肺肺	値其鷺翿	脩我矛戟	山有苞櫟	鴥彼晨風	蒙伐有苑	厹矛鋈錞	騏駵是中	駕我騏𢍰	從子于鵠	
カウジンのよきひとラウ（リウ）とかほよし	キャウに（をかに）シタウ（テウ）あり	〔メイセイ〕セイセイとあきらかなり	そのはヘイヘイとさかんなり	その〔ロ〕チウ（タウ）のさぎのはたをたつ	わが〔ボウ〕キャク（ゲキ）をおさめて	やまにハウラク（レキ）あり	イツととくとぶかの〔シン〕ヒンのたか	まじはれるたて（まじはりえがけるたて）あや（ウン）あり	キウボウのみすみのほこ ヨクシンのかざれるつかあり	キリウはこれセウ〔あたる〕	わがキシウ（ソク）のあをくろあじろに〔ガ〕す	シにコウにしたがはん	
・ラウ、叶朗老反 リウ、力久反（音柳）	苕タウ、叶徒刀反 テウ、徒雕反（音條）	晳セイ、之世反（音制）	肺ヘイ、普計反（音霈）	翿チウ、叶殖有反 ダウ、音導	戟キャク、叶訖約反 ゲキ	櫟ラク、叶歴各反 レキ、盧狄反（音歴）	風ヒン、叶孚愔反	苑ウン、叶音氳	錞シン、叶朱倫反 【タイ】、徒對反	中セウ、叶諸仍反	好コウ、叶呼侯反 カウ、呼報反（去聲）	鵠コウ、叶居號反	
		正音セキ 原書に叶字を欠く叶音	正音ハイ 原書に叶字を欠く叶音								「侯」大全作「候」	正音コク	

143	144	144	145	146	146	149	151	151	153	154	154	154	156	156
月出②	株林②	株林②	澤陂②	羔裘①	羔裘③	匪風①	候人①	候人②	下泉②	七月①	七月①	七月⑦	東山①	東山①
舒懮受兮	駕我乘馬	說于株野	有蒲與蕑	狐裘以朝	日出有曜	匪風發兮	何戈與祋	不稱其服	浸彼苞蕭	一之日觱發	三之日于耜	十月納禾稼	勿士行枚	烝在桑野
をもむろにしてイウサウ（シウ）たり	わが〔ジョウ〕ボ（バ）に〔ガ〕して	チウショ（ヤ）にやどり	ホと（かまと）ケン（カン）と〔ふじばかまと〕あり	〔コキュウ〕してもってタウ（テウ）す	ひいでてヤウ（ヨウ）たることあり	かぜのヘツ（ハツ）とひるがへるにあらず	クワとチツ（タイ）とをになわん	そのホク（フク）にかなはず	かの〔ホウ〕シウ（セウ）のあつまれるよもぎをひたす	イツのしもつきのひヒツヘイ（ハツ）とかぜさむし	サンの〔むつきの〕ひゆいてイ（シ）す〔すきとる〕	〔ジュウガツ〕クワコ（カ）のあわいねをいる（をさむ）	〔コウ〕ビ（バイ）をこととすることなし	ああ〔ソウ〕ショ（ヤ）にあり
受サウ、叶時倒反 シウ	馬ボ、叶滿補反 バ	野ショ、叶上與反 ヤ	蕑ケン、叶居賢反 カン、古顔反（音間）	朝タウ、叶直勞反 テウ、直遥反（音潮）	曜ヤウ、叶羊號反 ヨウ、羊照反	發ヘツ、叶方月反 ハツ	祋チツ・タイ 都律・都外二反	服ホク、叶蒲北反 フク	蕭シウ、叶疎鳩反 セウ	發ヘイ、叶方吠反 ハツ	耜イ、叶羊里反 シ	稼コ、叶古護反 カ	枚ビ、叶謨悲反 バイ	野ショ、叶上與反 ヤ
		ショは正音にもある			ヨウ通行本なし		二反併記で叶字を欠く例			「方」通行本作「芳」		カは右内側小字		

156	東山③	鸛鳴于垤	〔カン〕のみづとりチツ（テツ）のありづかになく	垤チツ、叶地一反 テツ、田節反	テツ通行本なし
156	東山③	于今三年	いまに〔サン〕ニン（ネン）	年ニン、叶尼因反 ネン	
156	東山④	親結其縭	みずからそのラ（リ）をむすぶ	縭リ・ラ、叶離羅二音	
157	破斧②	又缺我錡	わがカ（キ）ののみをかきつ	錡カ、叶巨何反 キ、巨宜反（音奇）	
161	鹿鳴①	食野之苹	ののハウ（ヘイ）を〔よもぎを〕はむ	苹ハウ、叶音旁 ヘイ	
161	鹿鳴①	鼓瑟吹笙	シツをコしサフ（セイ）をふく	笙サフ、叶師莊反 セイ	
163	皇皇者華①	皇皇者華	〔コウコウ〕とひかりあるはフ〔はな〕	華フ、叶芳無反、與夫叶	正音カ 與夫叶三字、宋本のみ
163	皇皇者華②	我馬維駒	わがむまこれコウ（ク）	駒、コウ、ク 恭于恭侯二反	二反併記で叶字を欠く例 二反とも通行本なし
165	伐木②	於粲洒埽	ああ あざやかにサイソウ（サウ）して	埽ソウ、叶蘇吼反 サウ、蘇報反（去聲）	
165	伐木②	陳饋八簋	キをつらぬること〔ハチ〕キウ（キ）	簋キウ、叶己有反 キ	
165	伐木③	伐木于阪	きをヘン（ハン）にきる	阪ヘン、叶孚嬪反 ハン	
168	出車①	于彼牧矣	かのベキ（ボク）に〔まきに〕	牧ベキ、叶莫狄反 ボク	
168	出車⑤	倉庚喈喈	〔ソウコウ〕のうぐひすケイケイとこえのやわらげる	喈ケイ、叶居奚反 【カイ】、音皆	
169	杕杜③	憂我父母	わが〔フ〕ビ（ボ）をうれふ	母ビ、叶滿洧反 ボ	
169	杕杜③	四牡痯痯	〔シボ〕クワンクワン（ケンケン）とつかれたり	痯ケン、叶古轉反 クワン、古緩反（音管）	

172	南山有臺③	民之父母	たみの〔フ〕ビ（ボ）	母ビ、叶蒲彼反ボ
172	南山有臺④	南山有栲	〔ナンザン〕コウ（カウ）〔あふち〕あり	栲コウ、叶音口カウ、音考
172	南山有臺⑤	遐不黃耇	なんぞ〔コウ〕コ（コウ）ならざらん	耇コ、叶古五反コウ、音苟
176	菁菁者莪①	樂且有儀	たのしんでまたガ（ギ）あり	儀ガ、叶五何反ギ
177	六月③	以定王國	もって〔オウ〕ヲク（コク）をさだむ	國ヲク、叶于逼反コク
177	六月⑥	飲御諸友	〔イン〕を〔ショ〕イ（イウ）にすすむ	友イ、叶羽已反イウ
177	六月⑥	張仲孝友	〔チョウチュウ〕が〔コウ〕イ（イウ）	友イ、叶羽已反（叶同上）イウ
178	采芑①	于此菑畝	このシビ（ボ）のあらたのうねに	畝ビ、叶毎彼反ボ
178	采芑①	簟茀魚服	テンフツのくるまのすだれ〔ギョ〕ホク（フク）のうほのやなぐひ	服ホク、叶蒲北反フク
178	采芑①	鉤膺鞗革	コウヨウのむがをほひ テウキョク（カク）のくつわづらあり	革キョク、叶訖力反カク
178	采芑③	伐鼓淵淵	つづみをうつことインイン（エンエン）と をだやかなり	淵イン、叶於金反エン
178	采芑③	振旅闐闐	〔シンリョ〕チンチン（テンテン）と つつみうつこへあり（さかんなり）	闐チン、叶徒隣反テン、徒顛反（音田）
179	車攻②	東有甫草	ひがしに〔ホ〕ソウ（サウ）あり	草ソウ、叶此苟反サウ
179	車攻③	之子于苗	このここにボウのかりす	苗ボウ、叶音毛
179	車攻⑥	兩驂不（倚）〔猗〕	〔リョウサン〕のふたつのそへむまイなら（アなら）ず〔ななめならず〕	猗イ、ア、於寄於箇二反（音意、叶於箇反）

172	「蒲」他本皆作「滿」	
172		
172	「古」他本皆作「果」	
176		
177		
177		
177		
178		
178		
178		
178	「金」他本皆作「巾」	
178	チン右内側、テン右外側	
179		
179	正音ビョウ	
179	「猗」大全作「倚」他本皆作「猗」	

181	**鴻雁①**	劬勞于野	ショ（ヤ）に〔クロウ〕す	野ショ、叶上與反 ヤ	
181	**鴻雁①**	哀此鰥寡	かなしきはこれ〔カン〕コ（クワ）のやもをやもめ	寡コ、叶果五反 クワ	コ右内側、クワ右外側
182	**庭燎②**	庭燎晰晰	にはびセイセイとほのかなり	晰セイ、之世反（音制） 與艾叶	正音セイ、セキ二音
183	**沔水①**	邦人諸友	くにたみ〔ショ〕イ（イウ）	友イ、叶羽軌反 イウ	宋本欠「叶」字
183	**沔水①**	誰無父母	たれか〔フ〕ビ（ボ）なからん	母ビ、叶蒲洧反 ボ	「蒲」他本皆作「滿」
184	**鶴鳴①**	聲聞于野	こへショ（ヤ）にきこふ	野ショ、叶上與反 ヤ	
184	**鶴鳴①**	爰有樹檀	ここにシウテン（タン）あり	檀テン、叶徒沿反 タン	
185	**祈父①**	祈父予王之爪牙	キホわれは〔オウ〕の〔カ〕ゴ（ガ）	牙ゴ、叶五胡反	
186	**白駒③**	賁然來思	ヒ（ホン）〔ゼン〕としてひかりありて	賁ヒ、彼義反（音悶） 賁ホン、又音奔	原書に叶字を欠く例 通行本「又」字なし
186	**白駒③**	爾公爾侯	なんぢを〔コウ〕とし〔みきとし〕なんぢをコ（コウ）として〔きみとして〕	侯コ、叶洪孤反 コウ	
186	**白駒③**	慎爾優游	なんぢが〔ユウ〕ヲを（イウを）つつしみ	游ヲ、叶汪胡反 イウ	「汪胡反」ヲ宋本なし 宋本「云俱反」ウ
186	**白駒③**	勉爾遁思	なんぢがトンサイ（シ）をつとめよ	思サイ、叶新齎反 シ	
187	**黄鳥③**	無集于栩	コ（ク）に〔はうそ〕にあつまることなし	栩コ、況甫反（音許） ク	原書に叶字を欠く例
188	**我行其野①**	復我邦家	わが〔ホウ〕コ（カ）にかへらん	家コ、叶古胡反 カ	
188	**我行其野③**	言采其葍	ここにそのヒョク（フク）をとる	葍ヒョク、叶筆力反 フク、音福	

190	191	191	192	192	193	193	199	200	202	205	208	208	209	209	209
無羊④	節南山②	節南山③	正月①	正月⑩	十月之交①	十月之交④	何人斯①	巷伯④	蓼莪⑥	北山①	鼓鐘②	鼓鐘②	楚茨②	楚茨②	楚茨③
實維豐年	有實其猗	維周之氐	憂心京京	員于爾輻	朔日辛卯	蹶維趣馬	不入我門	捷捷幡幡	飄風弗弗	憂我父母	鼓鐘喈喈	淮水湝湝	或剝或亨	執爨踖踖	
まことにこれ〔ホウ〕ニン（ネン）とせん	み（みのれる）ありてそれア（イ）たり〔ながし〕	これ〔シュウ〕のチ（テイ）にして〔もとなり〕	うれふるこころキョウキョウ（ケイケイ）とををいなり	なんぢがヒョク（フク）をませ	〔サクジツシン〕ボウ（バウ）	ケイはこれソウボ（バ）	わがビンにいらず	セウセウといちはやく ヘンヘンと かへそうして	〔ヒョウフウ〕ヒツヒツとすみやかなり	わが〔フ〕ビ（ボ）をうれへしむ	かねをうつことケイケイ（カイカイ）たり	〔ワイスイ〕ケイケイ（カイカイ）たり	あるいひはかわはぎあるいひはハウ（カウ）〔うまく〕す	サンを（をなりを）とることサクサク（セキセキ）とつつしみ	
年ニン、叶尼因反 ネン	猗ア、叶於何反 イ、於宜反(音醫)	氐チ、叶都黎反 テイ、丁禮反(音底)	京キョウ、叶居良反 ケイ	輻ヒョク、叶筆力反 フク、方六反	卯ボウ、叶莫後反 バウ	馬ボ、叶滿補反 バ	門ビン、叶眉貧反	幡ヘン、叶芬邅反 【ハン】芳煩反(音翻)	弗ヒツ、叶分聿反	母ビ、叶蒲彼反 ボ	喈ケイ、叶居奚反 カイ、音皆	湝ケイ、叶賢鷄反 カイ、戸皆反(音諧)	亨ハウ、叶鋪郎反 【ハウ】、普更反(音烹) カウ	踖サク、叶七略反 セキ、七亦反(音積)	
				フク通行本なし			正音モン		正音フツ (宋本 202-254 欠)	「蒲」他本皆作「滿」		排印本誤作「雞賢反」	「更」他本皆作「庚」 カウ=とおる		

210	信南山⑤	享于祖考	〔ソ〕キウ（カウ）にたてまつれり	考キウ、叶去九反カウ	「九」他本皆作「久」
210	信南山⑤	取其血膋	その〔ケツ〕ラウ（レウ）のちとあぶらとをとれり	膋ラウ、叶音勞レウ、音聊	
211	甫田①	倬彼甫田	タクとあきらかなるかの〔ホ〕チン（デン）	田チン、叶地因反デン	
211	甫田①	歲取十千	としごとに〔ジュウ〕シン（セン）をとれり	千シン、叶倉新反セン	
211	甫田①	今適南畝	いま〔ナン〕ビ（ボ）にゆいて	畝ビ、叶蒲彼反ボ	「蒲」他本皆作「滿」
211	甫田②	以我齊明	わがシバウ（メイ）のしとみをもって	明バウ、叶謨郎反メイ	（参考、齊シ、音咨）
211	甫田③	饁彼南畝	かの〔ナン〕ビ（ボ）にかれいするを	畝ビ、叶蒲彼反ボ	「蒲」他本皆作「滿」
211	甫田③	攘其左右	その〔サ〕イ（イウ）をとって	右イ、叶羽已反イウ	
218	車舝①	間關車之舝兮	カンカンとくるまこしらふるくるまのカツ（カイ）〔くさびあり〕	舝カイ、カツ胡瞎下介二反	二反併記で叶字を欠く例二反とも通行本なし
218	車舝①	雖無好友	〔コウ〕イ（イウ）なしというとも	友イ、叶羽已反イウ	
220	賓之初筵②	各奏爾能	おのおのそのニン（ノウ）を〔ソウ〕せり	能ニン、叶奴金反ノウ	
220	賓之初筵③	威儀反反	〔イギ〕ヘンヘン（ハンハン）とかへりみ	反ヘン、叶分遭反ハン	
220	賓之初筵③	威儀幡幡	〔イギ〕ヘンヘン（ハンハン）とかろがろし	幡ヘン、叶分遭反ハン	
225	都人士②	臺笠緇撮	〔ダイリュウ〕のすげのかささシセツのくろきかぶりせり	撮セツ、叶租悅反【サツ】、七活反	サツ宋本のみ
225	都人士③	我心苑結	わがこころウンキツ（ケツ）とせぐまりむすぶ	結キツ、叶繳質反ケツ	

248	248	247	246	245	245	245	241	240	237	237	237	228	228	225
鳧鷖⑤	鳧鷖⑤	既醉⑥	行葦④	生民⑧	生民⑦	生民③	皇矣⑧	思齊③	緜⑨	緜⑨	緜①	隰桑③	隰桑②	都人士④
燔炙芬芬	公尸來止熏熏	室家之壺	以祈黃耇	庶無罪悔	取羝以軷	鳥覆翼之	臨衝閑閑	肅肅在廟	予曰有奔奏	予曰有先後	陶復陶穴	其葉有幽	其葉有沃	垂帶而厲
やきものあぶりもの ヒンヒン（フンフン）とかうばし	〔コウシ〕きたりとどまってヒンヒン（クンクン）とやわらぎよろこべり	〔シツカ〕のキン（コン）〔みちあり〕	もって〔コウ〕コ（コウ）をもとむ	〔ザイ〕キ（クワイ）なからんことをこひねがって	テイを（ひつじを）とってはハイ（ハツ）をもってし	とりフとをおいイ（ヨク）としく〔はねしく〕	〔リンショウ〕ケンケン（カンカン）とゆるくしづかに	〔シクシク〕とつつしんでバウ（ビョウ）にます	われいはく〔ホン〕ソ（ソウ）あり	われいはく〔セン〕コ（コウ）あり	〔トウ〕フクのすへものあな〔トウ〕キツ（ケツ）のつちあな	そのはアウ（ユウ）としてくろきあり	そのはアク（ヲク）としてうるやかなるあり	たれるをびライ（レイ）たり
芬ヒン、叶豐匀反フン	熏ヒン、叶眉貧反クン	壺キン、叶苦俊反コン、苦本反（音悃）	耇コ、叶果五反コウ、或如字	悔キ、叶呼委反クワイ	軷ハイ、叶蒲昧反ハツ、蒲末反（音鈸）	翼イ、叶音異ヨク	閑ケン、叶胡員反カン	廟バウ、叶音貌ビョウ	奏ソ、叶宗五反ソウ、與走通（音走）	後コ、叶下五反コウ、胡豆反（去聲）	穴キツ、叶戸橘反ケツ	幽アウ、叶於交反ユウ	沃アク、叶鬱縛反ヲク、烏酷反	厲ライ、叶落蓋反レイ
			通行本「或如字」なし			通行本「叶」なし							ヲク通行本なし	

249	假樂④	燕及朋友	やすきこと〔ホウ〕イ（イウ）におよべり	友イ、叶羽已反 イウ		
256	抑⑪	我心慘慘	わがこころサクサクとうれう	慘サク、叶七各反、「慘」當作「懆」 七到反(音懆)		
257	桑柔⑫	征以中垢	をこなふに〔チュウ〕コク（コウ）をもってす	垢コク、叶居六反 コウ、古口反(音苟)		
258	雲漢⑤	滌滌山川	〔サン〕シン（セン）を〔デキデキ〕とすすぎはがせる	川シン、叶樞淪反 セン	「淪」他本皆作「倫」	
297	駉①	駉駉牡馬	ケイケイとこへたる〔こへたくましき〕〔ボ〕モ（バ）	馬モ、叶蒲補反 バ	「蒲」他本皆作「滿」 馬モ、ボの誤刻か	
297	駉③	以車繹繹	くるまをもちゆるにヤクヤク（エキエキ）とたへず（つらなれり）	繹ヤク、叶弋灼反 エキ	ヤク宋本なし	
297	駉④	有駰有騢	インありコ（カ）あり	騢コ、叶洪孤反 カ、音遐		
300	閟宮①	黍稷重穋	〔ショショクチョウ〕リョク（リク）し	穋リョク、叶六直反 リク、音六		
300	閟宮⑤	貝冑朱綅	〔バイチュウ〕のかいのかぶと〔シュ〕セウ（セン）のあかきいとあり（あけのつつり）	綅セウ、叶息稜反 セン、息廉反(音纖)		
304	長髪⑤	受小共大共	〔ショウ〕コウ（ケウ）〔ダイコウ〕をうけて	共コウ、叶居勇反 ケウ、音恭	ケウ←クキヤウ	
304	長髪⑤	爲下國駿厖	〔カコク〕の〔シュン〕ボウ（バウ）のときむまたり	厖ボウ、叶莫孔反 バウ、莫邦反(音忙)		
304	長髪⑤	何天之龍	〔テン〕のトウ（テウ）をになへり	龍トウ、叶丑勇反 テウ		
305	殷武⑥	陟彼景山	かの〔ケイ〕セン（サン）にのぼれば	山セン、叶所旃反 サン		
305	殷武⑥	松柏丸丸	まつかえキンキン（ガンガン）となをし	丸キン、叶胡員反 ガン	ガン、版本ハンは誤刻	
305	殷武⑥	旅楹有閑	もろもろのはしらケン（カン）とををいなるあり	閑ケン、叶胡田反 カン		